

第4学年算数科学習指導案

平成14年6月21日(金) 第5校時

土岐市立駄知小学校 4年3組

男子10名、女子7名 計17名

指導者 小川 文子

1、単元名 小 数

2、単元の目標

A(4) 小数の意味とその計算

(4) 小数の意味とその表し方について理解するとともに、小数の加法及び減法の意味について理解し、それらを用いることができるようにする。

ア、端数部分の大きさを表すのに小数を用いること。また、小数の表し方及び $\frac{1}{10}$ の位について知ること。

イ、小数が整数と同じ仕組みで表されることを知るとともに、数の相対的な大きさについて理解を深めること。

ウ、 $\frac{1}{10}$ の位までの小数の加法及び減法の計算の仕方を考え、それらの計算ができること。

3、単元について

(1) 教材について

この単元では、かさや長さについて既習した「3lと6dl」や「9cmと2mm」を端数部分の大きさを表すのに小数を用いることを理解し、短名数の単位であらわすことができるようにする。今年度から指導要領改訂の完全実施により、今まで3年生で学習してきた小数が4年生となった。また、分数の学習が先に行われていたが、教科書(大日本図書)では、小数の単元が先に学習することになっている。よって、児童はまだ分数によるはしたの表し方の経験をしていない。また、「1を10等分したものが0.1である」ことをおさえるには、かさの学習でのマスの目盛りや長さの学習での定規の目盛りを読むことで気付かせていきたい。

また、マス図から同じ位どうしの加減法ができることや、線分図から0.1がいくつ分集まった数なのかを調べることで、小数も整数と同じ仕組みで表されることにも気付かせていきたい。

(2) 児童の実態

今年度より本校では、4年と6年の算数科において少人数学級を実施している。よって、学習能力が同じようになるよう学級を2分し、現在17人を1学級として学習している。

少人数ということ、自分の思いを出しやすく、発表をする意欲もあり、それぞれの考えをノートにまとめることができる。しかし、どの子も自力解決をし、「わかった」「できた」という喜びを感じられるまでいかない。少人数学級のよさをいかし、つまづきのある子も算数がおもしろいと思えるようにきめ細かな援助をしていきたい。

小数の学習前に簡単な実態調査を行った。子どもたちは、生活の中でも小数はけっこう身近にあることを知っている。例えば、50m走の秒数、身長・体重、天気予報で出てくる温度などがそうである。しかし、その言葉は知っていても、小数のしくみまではわかっていない。この単元の学習を通じて、小数の意味や小数のしくみもおさえていきたい。

4、市教研のテーマとのかかわり

学ぶ楽しさと充実感を味わう算数教育の創造

今年度より学習指導要領の改訂による完全実施がスタートした。教科書を見ても、前学年の内容がそのまま復習単位として位置付けられており、一層の「基礎的・基本的な内容の確実な定着」を図るための“繰り返し学習”の教科書になっていることを痛感した。

今年度初めて、少人数学級での指導を経験し、一人一人に関わる時間が増えた。よって、一人一人の能力差もはっきりとつかめるようになってきた。算数が苦手だという子にも、わかる喜び、自分でできたという満足感をもってほしいという欲が強くなってきた。

また、私自身、自分の専門教科を算数として取り組んでいるのも、算数が好きだったからである。問題を悩んで悩んで、解けたときの喜びは、今でも忘れていない。そんな「わかる喜び」「できた充実感」を子どもたちも感じてほしい。

土岐市の小算研のテーマ「学ぶ楽しさと充実感を味わう算数教育の創造」を具現していくために、2つの重点にしぼり取り組んでいきたい。

どの子も見通しを持って取り組めるように、ねらいにせまる算数的活動の在り方を工夫する。

本単元では、かさをマス図で表したり、数直線で表したりしながら、数の相対的な大きさに気づかせていきたい。そのマス図や数直線による作業的な算数的活動を身につけることで、後半の小数の加減法の計算のしかたを考える手立てになるのではないかと考える。

問題解決の手立てとなるよう既習の学習内容を生かした単元指導計画を工夫する。

算数科は、系統性の強い教科である。よって、どの子にも学習の足場をできるだけ同じにするために、1単位時間に既習を振り返る時間を設け、そこで、本時の課題を解決する手立てとなるようにしたい。

本単元では、「11を10等分したものが0.11」であることに気づかせるために、2年生のかさの学習を想起させたり、「小数の加減法を0.1のいくつ分か」で考えることに気づかせるために、小数のしくみを想起させるなど、復習コーナーで確認し、板書して位置付けたい。

まとめの段階で、本時の学習が定着しているのか、必ず練習問題を解く時間を確保し、一人一人の定着の様子を把握する。(一人一人のつまずきに応じ、ていねいに個別指導・援助をしていく)